

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所  
〒259-1293 平塚市土屋 2946  
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス  
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

「諸行無常」とはいうけれど・・・

石積 勝

前回のこの国経研だより(2019年3月)では行川、岡本、後藤の各先生から定年退職にあたっての寄稿文をいただき、所長として僕も短い感謝の文章を書いた。また教授会では岡本、後藤の両先生から長年の神大勤務を振り返るご挨拶があった。いずれも心に沁みるものだったが、後藤先生(この時点では副学長)からは「長年一緒に仕事し、じつは自分と同じ歳で、本来一緒に今日退任の挨拶することになっていたであろうはずの、先に逝ってしまった二人の先生について触れたい」というご挨拶があった。「ずいぶんと構成メンバーも変わってしまったので、その二人を知るメンバーも少なくなったかもしれないが」と前置きされ、そのお二人について簡潔に「加藤薫先生は、<国際>が経営学部の生きる道だという信念のもとで全力投球された」「丸岡洋二先生は神大で学生運動をやり、カリキュラム改革は永久革命だという思いでいた」というお話をされた。ご自身の退任あいさつで、もっぱら先に逝った二人の同僚について語られるのは、いかにも後藤先生のお人柄だが、そこには残るメンバーへの気負いのないメッセージもあったと思う。

僕も感慨深くお二人を思い出した。加藤さんは学部開設準備の文字どおりの中心だった。僕も一緒にやったが、なんといっても加藤さんはAO・自己推薦入試(当時は一芸入試)、国際教育、VAC(Value Added Campus)構想など、今では学内外でも当たり前なこととなった、しかし当時では革命的な施策を30年前に打ち出し、学部内外の抵抗に怯まず前に進める役割を体を張って担った。圧倒的に不利な条件の中で、ここまで経営学部が生き延びてきたことの多くは、加藤さんの先見性と突破力に負っていると僕は弔辞で述べた(学長としての所要で代読になったが)。丸岡さんは加藤さんとは少し違うスタイルで学部を牽引してくれた。思想はラジカルに、しかし重心は低く、その人

柄と熱意で絶大な信頼を学生からも教職員からも集めていた。僕自身が学部長を務めていた時、学科主任として究極の誠意と正義感で学部運営を進め、その真最中に命を落とすことになった。「試みよ、試みよ、そして試みよ」が彼のモットーだったが、それを辛い思いとともに葬儀の弔辞の締めくくりとして僕は使わせてもらった。

その丸岡さんと国際経営研究所の専任研究員として机を並べていたのがテイオフィラス・アサモアさんで、丸岡さんもアサモアさんも専任教員を凌駕する熱意と行動力で学生を励まし、学部運営に献身されていた。初代、二代、三代の学部長の箕輪・衣笠両先生からの「専任教員として同時にお二人を加えたい」という提案には教授会メンバーも諸手を挙げて賛同した。アサモアさんについては別に寄稿文を要請されているのでそちらに譲るが、いずれにせよこの3名は皆、国内外での経験を踏まえ日本の大学教育に風穴を開けたいという思いで全力疾走されてきた。そうした先生方がわれわれより先に、定年前に逝ってしまうとは、なんとも不条理を感じるころだ。諸行無常といえどそれまでのことではあるのだが・・・。

先日の教授会で、学部運営のそもそもの考え方について何名かの先生方が触れられこともあり、あえて今回は過去を振り返りつつこの短文を認めさせていただいた。

P. S. 丸岡さんの「現代大学教育の問題点」という遺稿、加藤さんへの僕の弔辞、ついでに『国際教育の実践』(白桃書房)など、過去の資料ですが、ご希望の方は国際経営研究所でコピー等入手ください。

(国際経営研究所 所長/いしづみ・まさる)

